

研究テーマ	高山社授業員の派遣と方言分布
研究者・団体名	絹文化！お国ことば調査プロジェクト（群馬県立女子大学） 増山 侑来（4年） 佐藤 瑠香（3年） 小菅 友捺（2年） 佐藤 未睦（2年） 松本 花（2年） 長井 遥香（1年）
研究要旨	<p>本研究は、養蚕ことばにおける方言分布の実態を、養蚕業の歴史および高山社授業員の動きや技術指導の結果（桑園面積、繭生産量）と照合し、方言分布の形成過程を考察したものである。</p> <p>具体的には、令和2年度より継続的にすすめてきた〈桑の実〉を表す方言分布の解釈を行った。特に、「どどめ」が飛び火的に分布する広島県、「どどめ」ではない単純語が分布する石川県、福井県、岐阜県、京都府、兵庫県に着目し、方言分布の形成過程について考察した。各府県の養蚕業の歴史および高山社授業員の派遣数、桑栽培面積、収繭量の統計を、方言分布と照合する方法によって行った。その結果、〈桑の実〉に単純語を当てる地域は、養蚕業の歴史が長いことを確認できた。さらに、各府県において高山社からの授業員派遣があったのちには、桑栽培面積、収繭量が増加する傾向にあると解されるものの、養蚕業の歴史が長い府県の場合には、〈桑の実〉を表す「どどめ」までは流入しないことがわかった。すなわち、そのような府県において、〈桑の実〉を表す語は、高山社からの授業員派遣の影響は受けにくいとした。</p>
研究内容	
<p>0 はじめに</p> <p>この報告書は、研究成果報告書「高山社授業員の派遣と方言分布」の概要を記すものである。本研究の全体は、下記の Web ページにおいて、過去の研究成果と共に公開している。</p> <p>絹文化！お国ことば調査プロジェクト https://sites.google.com/mail.gpwu.ac.jp/kinubunkaokunikotoba</p> <p>1 本研究の目的（増山侑来・佐藤瑠香）</p> <p>本研究では、絹文化！お国ことば調査プロジェクト（2022）で残した課題を受けて、養蚕ことばにおける方言分布の実態を、養蚕業の歴史および高山社授業員の動きや技術指導の結果（桑園面積、繭生産量）と照合し、方言分布の形成過程を明らかにすることを目的とする。</p> <p>まず、「どどめ」が飛び火的に分布する広島県について、方言辞典類を用いて養蚕ことばの採録状況について調査を行い、語彙体系としての存在の有無を確認する。その結果と昨年度に調査した広島県の養蚕業の歴史と照合することで、広島県において「どどめ」が分布する要因を考察する。</p> <p>つぎに、〈桑の実〉の方言分布【図 1】で「どどめ」ではない単純語をあてている石川県（つばみ）、福井県（つばみ）、岐阜県（つばみ）、京都府（ふなめ）、兵庫県（ふなめ、しまめ）の養蚕業の歴史を調査し、これまでの研究で明らかとなっている岩手県、和歌山県、広島県の実態と比較対照を行う。</p> <p>最後に、群馬県、岩手県、石川県、福井県、岐阜県、京都府、兵庫県および広島県、和歌山県における高山社の授業員派遣数を年次別に整理し、各地域の特徴を明らかにする。また、桑の栽培面積や収繭量の統計と照合することで、高山社の授業員派遣と各地域の養蚕業の盛衰がどのように関わっているかを考察する。</p> <p>2 これまでの研究成果の概要（長井遥香）</p> <p>絹文化！お国ことば調査プロジェクト（2021、2022）では、〈桑の実〉の方言分布と人の動きについての関連性を明らかにするために、方言分布の実態と養蚕業発展の歴史を照合した。</p> <p>〈桑の実〉の方言分布【図 1】によると、群馬県を中心として関東圏に分布する「どどめ」は、和歌山県の 3 地点（伊都郡かつらぎ町大字佐野、有田郡金屋町谷、日高郡中津村上田原）、広島県の 1 地点（賀茂郡黒瀬町津江）にも飛び火的に分布している。これには、高山社の取り組みが関係しているとした。高山社は、明治</p>	

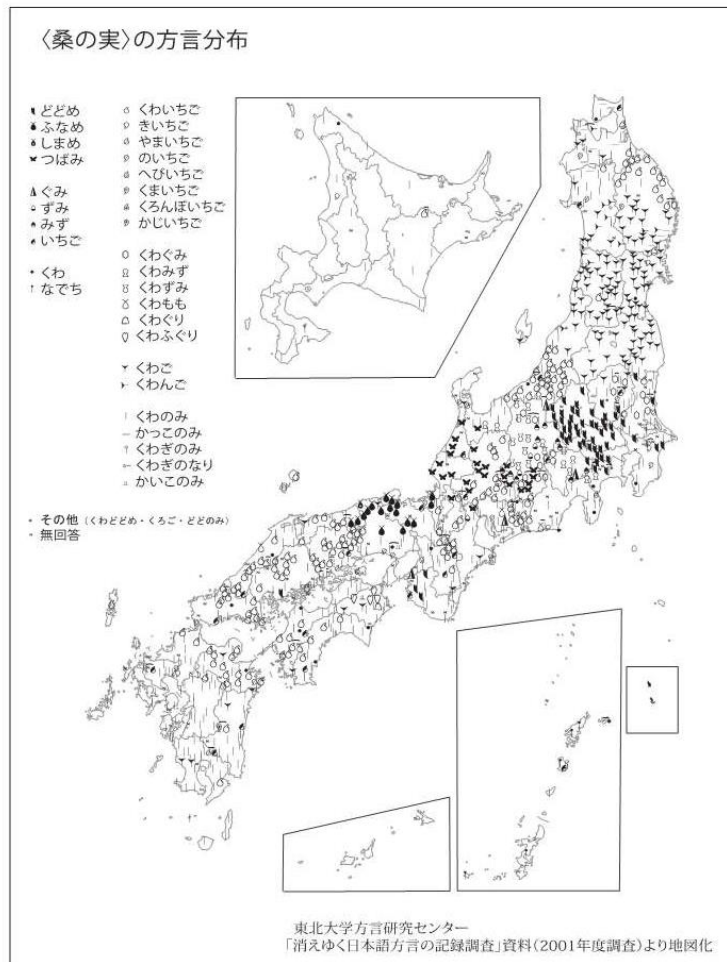


図 1 〈桑の実〉表す語の方言分布 (新井小枝子・2011)

後期から昭和にかけて、養蚕技術の研究を行って全国から受け入れた生徒に教え、授業員として各地へ派遣していた。この授業員が、桑の栽培方法と共に、群馬県方言である「どどめ」を伝えたとした。

さらに、岩手県には群馬県に次いで多くの授業員が派遣されているが、「どどめ」は分布していない。その背景には、和歌山県や広島県とは異なった養蚕の歴史があるのではないかと予想し、調査を行った。岩手県においては、養蚕が古くから重要な産業として位置づけられていた可能性が高く、もともと養蚕語彙が体系として存在していたと考えられる。そのため、群馬県から養蚕技術は積極的かつ盛んに学んではいるものの、群馬県の養蚕語彙は流入しにくく、「どどめ」が定着しなかったのではないかとした。

3 広島県の養蚕語彙体系 (佐藤瑠香・増山侑来)

広島県の養蚕語彙体系について記述するために、まずは方言辞典類に拠って調査を行う。小都勇二 (1959)、高橋孝一 (1986)、広島大学方言研究会編 (1977)、藤河喜美江・永井博・國學院大學方言研究会 (1934)、村岡浅夫編 (1981)、渡辺泰邦 (2001) を用いた。これらの辞典類から確認できた養蚕語彙は 86 語 (異なり語数) である。広島大学方言研究会編 (1977) を除くと 9 語 (異なり語数) 確認できた。広島大学方言研究会編 (1977) は、養蚕語彙を体系的に調査、記述しており、他の方言辞典類とは性質が異なる。そのため、それらを除いた 9 語を以下に示す。

- 〈蚕〉 カイコ ケゴ
- 〈桑〉 クワイチゴ〜クワノミ、ヤマクワ〜ヤマグワ
- 〈真綿〉 マワタ〜キヌワタ〜キマワタ

〈蚕〉を表す語彙はカイコと蚕の幼虫を表すケゴがみられた。群馬県や岩手県などでみられる〈蚕〉に尊敬を表す接辞がついた形式は確認できなかった。〈桑の実〉を表す語としてはクワイチゴ、クワノミがみられ、果実のなる落葉高木そのものを指してヤマクワ、ヤマグワという語がみられた。また、隣接語彙として〈真綿〉

を表す語がマワタ、キヌワタ、キマワタの 3 語みられた。これは、岩手県の 112 語と比べると圧倒的に少なく、岩手県の方言辞典類には採録されていた〈廃物〉、〈習俗〉に関する語彙も確認できなかった。広島県は、和歌山県と同じように養蚕語彙の語彙量が極めて少なく、群馬県や岩手県のような養蚕先進地域が有している語彙体系とは異なる。広島県では 1700 年半ばから養蚕の奨励は行なわれていたものの、産業として定着したのは明治以降であった。そのため、外部の養蚕先進地域から養蚕技術を学ぶ際に、〈桑の実〉を表す「どどめ」という語彙がそのまま流入し、定着しやすかったと考えられる。

4 〈桑の実〉に「どどめ」以外の単純語が分布する地域の養蚕業の歴史

〈桑の実〉に「どどめ」ではない単純語をあてている石川県、福井県、岐阜県、京都府、兵庫県の養蚕業の歴史を調査した。絹文化！お国ことば調査プロジェクト（2022）で調査を行った岩手県、広島県、和歌山県の養蚕業の歴史と比較をすると、「どどめ」ではない単純語をあてている各府県は、近代化以前より養蚕が生業として強く定着しており、養蚕先進地域である岩手県の養蚕業の実態と類似していると考えられる。

4-1 石川県（松本花）

石川県における養蚕業の歴史は安政元年まで遡ることができ、明治 8（1875）年には養蚕を通じた他県とのつながりも持っていたことがわかった。ただし、延喜 5(905)年に醍醐天皇の勅命を受けて撰修された『延喜式』の記述では、加賀国では弘仁・貞観時代(810~877 年)から調として白絹十疋を納めていた、ということが述べられている。加賀国の農民たちにとって絹は、平安時代前期にはもう既に、生活する上で欠かすことが出来ない、身近なものであったと推察される。また、明治 8 年には前橋・東京・奥州・上州と養蚕業を通して誰がどのようなつながりを持っていたかという詳細な記録もみられる。

4-2 福井県（佐藤瑠香）

福井県では、律令時代にはすでに絹が税として納められていた。江戸時代には羽二重などの絹織物業が栄えるなど、近代化以前より養蚕業が人びとの生活のなかに浸透していたと考える。調査した県史には、越前の律令時代の調について「絹を輸し」とあることから、藩政時代以前にも絹織物業が広く行われていたと考える。江戸時代には、羽二重を中心とする絹織物が栄え、全国でも有数の産地であったことがわかる。養蚕の商品生産としての発達は江戸時代末期であるが、それ以前から福井県は織物の一大産地であり、養蚕業が人びとの生活に根付いていたと考えられる。

4-3 岐阜県（佐藤未睦・佐藤瑠香）

美濃国では平安時代には絹を税として納めており、飛騨国では明確な年代の記述はみられなかったものの、古くから真綿や紬を生産していた。飛騨国では享保前後から、商品生産としての養蚕業が推し進められるようになり、養蚕先進地域から学んだ桑や蚕種の改良が図られた。これらのことから、岐阜県では近代化以前より農間余業として養蚕が確立しており、現金収入を得るための重要な生業として人びとの生活の中に定着していたと考える。明治 14（1881）年には小規模ながらも 5 か所に伝習所が設置され、養蚕技術の伝習が図られた。また、同時期に養蚕教師によって秋蚕飼育が伝えられ、明治 30 年代、40 年代の養蚕業の発展に大きな影響を与えた。また、明治 20 年代以降には桑園経営への移行が進められたとの記録もある。明治 40 年代になると模範桑園がつけられるようになり、本格的な桑栽培の基盤が固められた。

4-4 京都府（佐藤瑠香）

『延喜式』の記述から、平安時代中期には丹波、丹後の両丹地域が絹糸の一大産地として知られていたとわかる。京都府では明治期になると群馬県や福島県などから教師の招聘を積極的に行っているが、産業として奨励される以前から養蚕業が生業として確立していたと考える。明治 10(1877)年頃には群馬県から教師を任用

している。明治 15 (1882)～16(1883)年頃には上武地方から教師を招き、清涼育養蚕伝習所を開設するなど飼育法の改良を行っている。福島県からも教師を招聘し温暖育を学ぶなど、合理的な飼育方法を先進地域から積極的に取り入れていることがわかる。京都府では遅くとも平安時代中期には絹糸を産しており、丹波、丹後を中心として養蚕が盛んに行なわれていた。また、桑樹の栽植など、江戸時代末期からその後の製糸業が興隆する基盤が整えられてきた。これらのことから、開港後、養蚕が本格的に産業として奨励される以前から、京都府では養蚕業が確立しており、特に両丹地域は絹糸の主要な産地であったと考えられる。

4-5 兵庫県 (佐藤瑠香)

兵庫県では、『続日本紀』の記述から、但馬・播磨を中心として遅くとも奈良時代には絹織物業が発達しており、特に但馬は桑の産地として広く知られていた。近代化に伴い養蚕業が奨励される以前より、兵庫県では農民の生活を支える生業として確立していたと考える。兵庫県では、遅くとも奈良時代には但馬、播磨が織物業の盛んな地域として知られており、養蚕業が農民の家内手工業として行われる一方で、高級織物も多く算出していたと考えられる。また、兵庫県の特徴として但馬地方が古くから桑の産地であったことがあげられる。兵庫県では、但馬、播磨を中心として織物業が栄えていたなどの古い歴史があり、明治に養蚕が産業として奨励される以前から養蚕業が確立していたと考えられる。江戸時代後期からみられる養蚕の商品生産としての興隆は、それ以前に確立していた絹織物業の長い歴史が基盤になっていると考える。

5 高山社の日本全国への授業員派遣数と養蚕業の推移 (小菅友捺・長井遥香)

明治 22 (1889)～大正 14 (1925) 年にかけての、高山社授業員の派遣数および桑栽培面積、収繭量の統計に基づいてグラフを作成し、授業員派遣数と桑栽培面積、収繭量の増減の関係を確認する。この年間に限定したのは、高山社の授業員派遣数および全国の桑栽培面積、収繭量の統計の、すべての数値が存在することによる。授業員派遣数が多い府県は、その直後から桑栽培面積、収繭量が増加に転じる傾向にある。以下に述べる節と、そこに掲載するグラフやそのキャプションに用いている記号は、下記の凡例にしたがって記述する。

凡例

5-1-1～5-2-5 までの節タイトルは、都道府県名、(派遣人数の合計)、【図番号】の順とした。

棒グラフ：高山社からの授業員派遣数の推移

折れ線グラフ：桑栽培面積、収繭量の推移

●：桑栽培面積の最大値が 10,000ha 以上の地域のグラフ

○：桑栽培面積の最大値が 10,000ha 未満の地域のグラフ

▲：収繭量の最大値が 3,000,000t 以上の地域のグラフ

△：収繭量の最大値が 3,000,000t 未満の地域のグラフ

※目盛りを変更：他の都道府県と比べると数値の差が大きいため、独自の目盛りを使用したグラフ

5-1 授業員派遣数が 100 人以上の地域

5-1-1 群馬県 (5316 人) 【図 2】 【図 3】

群馬県では、派遣の人数に、期間による大きな偏りはない。明治 43 (1910) 年が最多で 253 人である。グラフ中の最初と終わりの数年間のみ他の年と比べ少ないが、その間の期間はほぼ人数に大きな変化はない。

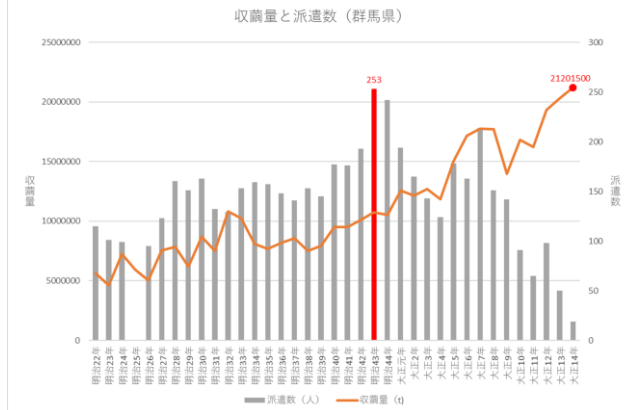
群馬県は高山社のある県であり、授業員は全国で最も多く派遣されている。また、それだけに桑の栽培面積、収繭量が他の府県に比べて圧倒的に多い。右肩上がりになっていることから、高山社授業員の派遣によって、桑栽培面積や収繭量が増加したとも考えうる。

5-1-2 岩手県 (1863 人) 【図 4】 【図 5】

派遣数がほぼ一定である群馬県とは対照的に、岩手県では派遣数が集中している時期がある。派遣数が最多の明治 41 (1908) 年とその前後で派遣が多い。岩手県では、派遣数が集中した期間ののちに、やや遅れて桑栽培面積、収繭量が増加する。高山社授業員が桑栽培、養蚕の発展に影響を与えたものと考えられよう。



● 図2 桑栽培面積と派遣数（群馬県）



▲ 図3 収穫量と派遣数（群馬県）※目盛りを変更



● 図4 桑栽培面積と派遣数（岩手県）



▲ 図5 収穫量と派遣数（岩手県）

絹文化！お国ことば調査プロジェクト（2022）では、岩手県においては、「どどめ」という語が定着しなかった要因を考察した。また、養蚕奨励以前から上納用の真綿が生産されていたことや、蚕に尊敬を表す接辞や敬称を付した呼称が存在していることから、養蚕の先進地域であったことを示した。一方、育蚕の改良には高山社との関わりが多くあったことがわかった。グラフにも、高山社との関わりや技術導入のあり方が顕著にあらわれているといえよう。

5-1-3 兵庫県（148人）【図6】【図7】

授業員は明治 26（1893）～大正 3（1914）年にかけてと、大正 5（1916）年に派遣されており、明治 39（1906）年に最も多い 22 人が派遣されている。

4-5 で述べたように、兵庫県では奈良時代から織物業が営まれており、養蚕業が農民の家内手工業として行われていた。そのため、〈桑の実〉に単純語を当てている他地域と比較しても、桑栽培面積と収穫量の両方で、授業員派遣以前から大きな数字を記録している。一方で、先進地域と比較すると、その飼育技術は拙いものであった。授業員の招聘は、古くから続いていた養蚕業をさらに発展させる目的で行われており、岩手県と同様に、授業員が派遣される前に、既に養蚕語彙の体系が確立していたと考えられる。

5-1-4 福井県（127人）【図8】【図9】

授業員は明治 21（1888）～明治 41（1908）年にかけて派遣されている。うち明治 25（1892）年と明治 34（1901）年には派遣が行われていない。最も派遣人数が多いのは明治 27（1894）年の 40 人である。

福井県は、江戸時代末期から商品生産としての養蚕が発達し、他県の伝習所へ積極的に生徒を送るなど製品の改良にも努めていた。凡例の分類方法では、桑栽培面積と収穫量がいずれも少ない部類に分類されるが、飼育過剰に陥り桑葉不足になってしまったという記述もみられるほか、蚕種にまとまりがないという指摘を受けつつも、糸量は豊富であったという記録もある。以上より、高山社からの授業員の派遣を受ける前から、改良



● 図6 桑栽培面積と派遣数（兵庫県）



▲ 図7 収穫量と派遣数（兵庫県）



○ 図8 桑栽培面積と派遣数（福井県）



△ 図9 収穫量と派遣数（福井県）

の余地はありつつも養蚕業は成功していたとみることができるだろう。加えて、授業員派遣後に桑栽培面積や収穫量に増加が見られることから、授業員が伝えたのは、岩手県同様に、養蚕に関する基本的な知識ではなく、先進的な養蚕技術だったと考えられる。

5-2 派遣数が100人未満の都道府県

5-2-1 京都府（38人）【図10】【図11】

授業員派遣は明治30（1897）～明治38（1905）年の間は毎年行われており、明治32（1899）年の9人が最も多い。

京都府では、平安時代中期から絹糸が生産され、また江戸時代末期には桑樹の栽植も行われるなど、養蚕が古くから盛んに行われている地域である。また、明治期には、明治10（1877）年頃に群馬県から教師を任用している。明治15（1882）～16（1883）年頃には上武地方から教師を招き飼育法を改良しようとしている。また、福島県からも教師を招聘している。高山社授業員が派遣される以前から、群馬県の教師が派遣されており、この時点で「どどめ」が流入し広まる可能性はある。しかし「どどめ」は用いられていない。そのため、京都府では、高山社からの授業員派遣以前から、すでに〈桑の実〉の名称を含む養蚕語彙の体系が確立していた可能性があり、「どどめ」という語は流入するまでにいたらなかったと考える。

5-2-2 石川県（16人）【図12】【図13】

授業員は大正4（1915）～大正9（1920）年にかけては毎年派遣されており、この期間に集中している。

石川県では、桑栽培と授業員派遣の関係は薄いように思われる。収穫量に関しては、大正10（1921）～大正14（1925）年にかけてグラフが大きく傾いているため、授業員派遣ののちに増加しているといえるが、明治24（1891）年以降、その年の1,848,980tを超えるのは大正9（1920）年（1,906,520t）になってからであり、なぜ大正8（1920）年までの期間に収穫量が明治24（1891）年を超えなかったのか、どれほど授業員派遣が影響



○ 図 10 桑栽培面積と派遣数（京都府）



▲ 図 11 収穫量と派遣数（京都府）



● 図 12 桑栽培面積と派遣数（石川県）



△ 図 13 収穫量と派遣数（石川県）

を与えたかについては、明確ではない。

石川県は、弘仁・貞観時代に税として絹を納めており、古くから絹と深い関わりを持っていたようである。養蚕業に関する記述で最も古いのは安政時代のものであり、その後、明治期には群馬、東京、奥州といった地域に養蚕技術を学んだとされる。石川県には、大正期に高山社授業員が何度か派遣されている。明治、大正時代に群馬県の養蚕教師が派遣され、養蚕技術が流入していると考えられるものの、石川県ではそれ以前から養蚕という生業が展開しており、〈桑の実〉を表す「どどめ」までは流入しにくい土壌があったと考えられる。

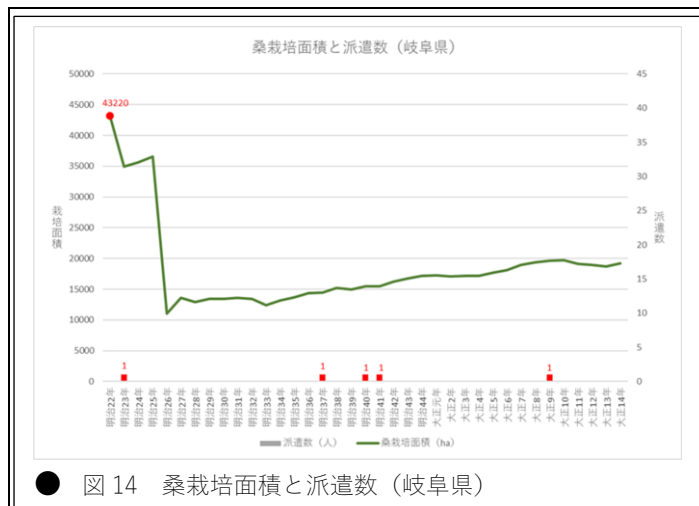
5-2-3 岐阜県（5人）【図 14】【図 15】

岐阜県では、明治 23（1890）年、明治 37（1904）年、明治 40（1907）年、明治 41（1908）年、大正 9（1920）年に、1 名ずつの授業員派遣しかない。

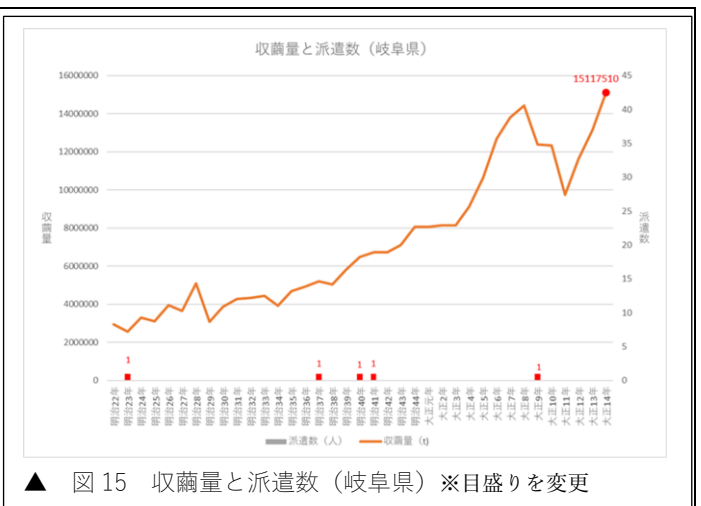
岐阜県も、石川県と同様に、古くから絹の生産がされていた。しかし、養蚕に関する記述は見られなかった。明治時代前半においては、農閑期に養蚕業を営んでいたものの、それは古くからの方法であったようだ。明治 14（1881）年には伝習所が設置され、明治 15（1882）年には福島県保真社社長渡辺源兵衛の「養蚕説」を勸業課月報に掲載し、養蚕技術を紹介した。

桑については、明治 20 年代に野生の桑の使用から桑園経営への切り替えが始まり、明治 30 年代に畑での栽培が普及した。グラフをみると、収穫量は右肩上がりになっており、大正期の収穫量はこの調査で扱っている府県の中で比較すると、極めて多い。桑の栽培面積は、桑園経営に切り替わったにもかかわらず、明治 26（1893）年に突然大きく減少している。ただ、明治 22（1889）～明治 25（1892）年の栽培面積が多いということには、やはり桑園経営が関わっている。収穫量の増加の度合いに比べ、栽培面積の増加は緩やかである。

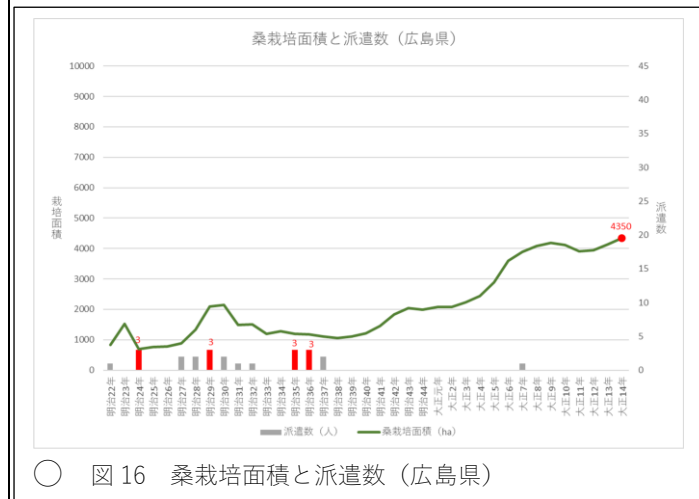
高山社授業員の派遣数が少なく、時期にもばらつきがあるため、高山社授業員が岐阜県の養蚕業にどれほど関わっていたのか考えるのは難しいが、先述したように比較的授業員派遣が集中していた明治 37（1904）年、明治 40（1907）年、明治 41（1908）年ののちに収穫量が大きく増加している状況は指摘することができる。いずれにせよ、歴史、グラフのどちらから見ても養蚕の先進地域であり、群馬県からの技術導入をするまでも



● 図 14 桑栽培面積と派遣数（岐阜県）



▲ 図 15 収穫量と派遣数（岐阜県）※目盛りを変更





○ 図 18 桑栽培面積と派遣数（和歌山県）



▲ 図 19 収穫量と派遣数（和歌山県）

「和歌山県は群馬県などと比べて養蚕の後進地域であったといえる（10 ページ）」ことから、「どどめ」という語が用いられるようになったと結論づけた。

グラフをみても広島県と同様に、明治期は桑栽培面積、収穫量ともに他の府県と比べ少なく、大正期になってから大きく増加していることから、和歌山県は養蚕の後進地域であったことや、高山社授業員が和歌山県の養蚕業の興隆に与えた影響が大きいことがわかる。

6 研究のまとめと課題

本研究では、「どどめ」が飛び火的に分布する広島県、「どどめ」ではない単純語をあてている石川県、福井県、岐阜県、京都府、兵庫県に着目し調査を行い、養蚕語彙における方言分布の形成過程について考察した。

広島県の調査では、養蚕語彙が 9 語しかなく、群馬県や岩手県と比べると強固な養蚕語彙体系を持っていないことがわかった。また、絹文化！お国調査プロジェクト（2022）の調査から、広島県は養蚕の後進地域であることがわかっている。これらのことから、広島県は、強固な養蚕語彙体系を持っていなかったため、外部の養蚕先進地域から養蚕技術を学ぶ際に、〈桑の実〉を表す「どどめ」という語彙がそのまま流入し、定着したと結論づけた。

つぎに、「どどめ」ではない単純語があたっている地域の養蚕業の歴史を調査した。「どどめ」ではない単純語があたっている地域は近代化以前より養蚕が生業として強く定着しており、養蚕先進地域である岩手県の養蚕業の実態と類似しているとした。

最後に、「どどめ」ではない単純語があたっている地域への高山社授業員の派遣数および桑栽培面積、収穫量を調査した。各統計に基づき、府県ごとの授業員派遣数を、同じく府県ごとの桑栽培面積、収穫量の増減と照合した。その結果、各府県が高山社から技術を学び、授業員派遣数が多い府県の方が桑栽培面積、収穫量の増加している傾向にあることがわかった。これは、養蚕について学ぼうとする意志のあらわれではないかとした。

以上の考察から、〈桑の実〉に「どどめ」以外の単純語があたっている地域は、岩手県と同様に近代以前からの養蚕業の歴史があり、高山社からの技術が導入される以前からの養蚕技術や養蚕語彙が存在しており、高山社からの技術を学んではいるものの、「どどめ」までは流入しにくかったのではないかと考えられる。これを検証するために〈桑の実〉に「どどめ」以外の単純語があたっている地域の養蚕語彙体系を調査することを今後の課題とする。また、〈桑の実〉に単純語があたっていない地域、すなわち合成語があたっている地域の養蚕業の歴史を調査し、絹文化！お国ことば調査プロジェクト（2021、2022）や、本研究の成果と比較をすることによって、養蚕語彙の方言分布の形成過程の考察を深めていくこともまた、今後の重要な課題に位置づけられる。

参考文献

- 新井小枝子「〈桑の実〉を表す語彙-造語法と方言分布-」『国文学 言語と文芸』第 127 号（おうふう社・2011）
 石川県編『石川県史 第 1 編』（石川県・1927）

- 石川県編『石川県史 第 2 編』(石川県・1928)
石川県編『石川県史 第 4 編』(石川県・1931)
小都勇二『たかたことば 高田郡方言集』(郷土史調査会 郡山文庫・1959)
絹文化! お国ことば調査プロジェクト「養蚕ことばにおける方言分布の形成過程と養蚕業の展開」(『絹ラボ研究成果報告書』(群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会・2021)
絹文化! お国ことば調査プロジェクト「養蚕ことばにおける方言分布と高山社生徒・授業員の動き——〈桑の実〉の方言分布を解明するために——」(令和 3 年度絹ラボ研究助成研究成果報告書)(群馬県立女子大学文学部国文学科新井小枝子研究室・2022)
岐阜県『岐阜県史 通史編 古代』(岐阜県・1971)
岐阜県『岐阜県史 通史編 中世』(岐阜県・1969)
岐阜県『岐阜県史 通史編 近世上』(岐阜県・1968)
岐阜県『岐阜県史 通史編 近世下』(岐阜県・1972)
岐阜県『岐阜県史 通史編 近代上』(岐阜県・1967)
岐阜県『岐阜県史 通史編 近代中』(岐阜県・1970)
岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』(岐阜県・1972)
皇典講究所, 全国神職会校訂『延喜式: 校訂. 下巻』(校訂延喜式出版部・1931)
高橋孝一『びんごばあ 備後福山地方の方言』(キングパーツ・1986)
広島大学方言研究会編『広島県高田郡美土里町本郷方言の衣食住語彙: 特集』(広島大学方言研究会・1977)
藤河喜美江・永井博・國學院大學方言研究会『廣島縣安藝郡坂村方言集. 廣島市方言集』(國學院大學方言研究會・1934)
村岡浅夫編『広島県方言辞典』(南海堂・1981)
渡辺泰邦『広島県の植物方言と民俗』(シンセイアート出版部・2001)

参考 Web ページ

政府統計の総合窓口 (e-stat) 統計で見る日本> 繭生産統計

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tclass=000001026599&cycle=7>

国立国会図書館デジタルコレクション『京都府誌 上』(京都府編・1915)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1229654>

国立国会図書館デジタルコレクション『兵庫県史 第 1 巻』(兵庫県史編集専門委員会編・1974)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/9573663>

国立国会図書館デジタルコレクション『兵庫県史 第 3 巻』(兵庫県史編集専門委員会編・1978)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/9574094>

国立国会図書館デジタルコレクション『兵庫県史 第 4 巻』(兵庫県史編集専門委員会編・1979)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/9574438>

国立国会図書館デジタルコレクション『兵庫県史 第 5 巻』(兵庫県史編集専門委員会編・1980)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/9574643>

国立国会図書館デジタルコレクション『福井県史 第 1 冊』(福井県編・1920)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/960756>

国立国会図書館デジタルコレクション『福井県史 第 2 冊』(福井県編・1920)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/960757>

国立国会図書館デジタルコレクション『福井県史 第 3 冊』(福井県編・1920)

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/960758>